

学生スポーツボランティアのシステム構築と活動支援

金森雅夫¹⁾ 黒澤 毅¹⁾ 高橋佳三²⁾ 豊田則成²⁾

Reports on Activities of Student Volunteers who help with Relief Work and Sport in the Great East Japan Earthquake, and Future Task for the System of Curriculum on the Volunteer Sport Training

Masao KANAMORI Takeshi KUROSAWA Keizo TAKAHASHI Norishige TOYODA

Key words : volunteers, The Great East Japan Earthquake, curriculum

1. はじめに

(コーディネーター 金森 雅夫)

本日の本題は、学生スポーツボランティアのシステム構築であるが、これは、「大学創設期にボランティア活動の意義を認め、単位化を検討しなさい」という森前学長の意向で始まった。検討は、地域コースの教員が中心となった。豊田は、研究紀要(豊田則成ら:「スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは?—びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から—)に発表し、ボランティアの意義について理論的に深めた。さらに、ボランティア手帳を作り、ボランティア活動の評価指標が検討された。飯田学長から大学教育の質保証として、ボランティア活動の単位化の進言もあり、教務委員会の議論を経て単位化に至っている。私は、この経緯を報告すると共に、全国大学質保証検討会(飯田委員長)のアンケート解析担当に携わったのでその結果を報告する。

ボランティア活動を単位化しているのは半数以下の10校(45.5%)であった。また、必修の大学はなく、全て選択科目であった。履修学年は1年生(6校)から4年生(4校)まで広く分布している。15-45時間のボランティア活動をもって1単位とするところが多かった。なお、4単位まで認めている大学も

あった。AO入試のエントリーの観点に、「地域でのスポーツ活動・ボランティア活動などの実績のある人」を入れている大学もある。

今回は、沖縄ボランティア活動について、黒澤毅、東日本大震災復興ボランティアなど最近のボランティア活動について高橋佳三、本学授業『スポーツボランティア実習』の概要と問題点を豊田則成から報告する。

2. 沖縄ボランティア活動について

(黒澤 毅)

【2011夏休み青少年支援プロジェクトの概要】事業名: Hilfe fuer Japan 義援金補助事業「2011夏休み青少年支援プロジェクト」

期 間: 7月26日～8月23日 29日間

【対象】: 福島県内(福島市、いわき市、郡山市)に在住する小学校1年生から高校3年生の子ども達110名

【支援内容】: 子ども達の生活指導・学習指導をはじめ、サッカーやバスケット、水泳などの部活動を立ち上げてスポーツ指導を行った。その他、期間中に充実した体験活動の指導や指導補助を行ったり、手作り運動会の企画・運営等に携わった。自然体験活動(キャンプ、シュノーケル体験・各種体験教室: 空手教室、折り紙教室、サーターアンダギー教室など)を沖縄国際ユースホテルを活動拠点として行った。

【活動の様子と学生ボランティアの声】

運動会：全てが手作りの運動会は、地元地域からの様々な支援を受けて実施することができた。子ども達は元気に走り回るとともに、感謝する気持ちを学んだ。

「運動会はすべてが手作りで準備も大変だったが、大空の下で元気いっぱい走り回る子ども達を見て、本当にやってよかったと思った」

キャンプ：学年ごとに3回に分けて行われたキャンプでは、沖縄の大自然の中、生き生きとする本来の子ども達の姿があった。

「透き通る海、蒼い空、白い砂浜に囲まれたキャンプ生活の中で子ども達は一生懸命に遊んでいました」

部活動：サッカー部は京都パープルサンガから頂いたユニフォームを着て、地元のサッカー交流会に参加させていただいた。

「学年はばらばらのチームだったけど、最後に心は一つになったと思います」

「ホームシックで毎日泣く子の枕元には必ず懐中電灯がありました。海に行っても「津波きたらどうするの」と聞いてくる子もいて、元気でも震災は子供たちに影響を与えていました。しかし、キャンプや運動会、たくさん活動が子供たちを変化させ、楽しそうに走り回っている子供たちを見て、とても嬉しかったです。スタッフは寝る時間を削って運動会やキャンプの準備をしたり、休む時間もなくて正直とても大変な毎日だったけど、子供たちが思いきり楽しんでいる姿を見てそれがとにかく嬉しくて、まだまだできる、こんなにやりがいのあることを経験できることって凄い！と思いました」

今後について：少しでも多くの子どもたちが、未来ある子どもとしてあるべき姿に戻り、元気に走り回れる環境を提供する必要がある。そのためには活動を継続することが望まれるが、多くの義援金や協力が必要であることから震災を風化させずに我々ができることを少しずつでも実行することが望まれる。



写真1



写真2



写真3



写真4

3. 東日本大震災復興ボランティア

(高橋佳三)

【期間】8月16日～30日 5泊6日(うち車中泊2泊) × 4班

【滞在地】岩手県遠野市 宮代公民館・第四区公民館

【活動拠点】遠野まごころネット(遠野市総合福祉センター)

【活動地】岩手県大槌町, 岩手県釜石市, 岩手県大船渡市, 岩手県陸前高田市

【主な活動内容】：がれき処理, 廃屋の床板はがし, 仮設住宅付近の草抜き, 仮設住宅付近の側溝の掃除, がれき材の薪割り, 教育支援活動, カフェ活動, びわスポキッズプログラム他

【参加者数】1班39名, 2班35名, 3班33名, 4班39名

【活動の様子】

がれき処理, 廃屋の床板はがし, 仮設住宅付近の草抜き, 仮設住宅付近の側溝の掃除: 田んぼや畑, 林の中, 線路沿いなど, あらゆるところに流れ着いたがれきを丁寧にあつめ, 分別し, 捨てる作業. 本学学生の活動の様子を隊長さんが高く評価してくれて, 一番体力のいる現場に入れてくれるようになり, 学生たちは一所懸命に作業をしていた.

仮設住宅付近の作業では, 非常に単純な草抜きや側溝の掃除であっても, 「一人ではできないから, 本当にありがたい」と涙を流しながら感謝して下さったご老人がおられ, 学生たちにとっては「自分のしていることでここまで喜んでくれる人がいる」という大きなやりがいとなっていたようである.

教育支援活動: 千葉の予備校講師や30年小学校教諭をしていた方々と共に, 学生数名が仮設住宅の集会場などを利用して子供たちの勉強の手助けをする活動に参加. 子供たちは「勉強して大学にいるよりは, 早く働いた方がいいのではないか」という悩みを抱えているようで, とにかく勉強が遅れている. そんな子供たちと, カルタやゲームを通して勉強する楽しさを伝え, 学ぶ意欲を喚起しようと

いう活動で, 学生たちも子供たちとの交流を通して様々なことを感じたようである.

カフェ活動: 仮設住宅の集会所などを利用してカフェを作り, 住民の皆様が集まっていただけで少しでもコミュニティーの形成に役立てば, というこで行われている活動. 学生が数名参加し, 住民の皆様と交流すると共に打ち解けると悩みの相談などもされたようで, 「非常に勉強になった」と学生は語っていた.

びわスポキッズプログラム: 本学の特色の一つである「びわスポキッズプログラム」を開催. 残念ながら, 被災地の方では「通常の生活を取り戻すのが先で, まだそれどころではない」という風にも受け取られ, 逆に被災地の現状を思い知らされることになった. それでも, 吉里吉里村の小学校で開催させていただいたときには「もし機会があればぜひ」ということでお話をいただき, 好評を博したようである. 我々が滞在した遠野市では2班までに2度開催し, こちらは子供たちと学生が楽しそうに思いきり遊んでいた.

活動の総括: 今回の活動を通して, 私は本学学生の持つパワーを見直し, 頼もしさを感じた. スポーツ大学の学生の元気良さ, 挨拶ができること, 統制のとれた行動などが高く評価された. これは, 日頃から部活動やスポーツ活動を通して培われたものである. また, 意外だったのは「食事がずっとおいしかった」こと. フレッシュマンキャンプの経験や, アルバイトまたは一人暮らしで食事を作る経験をしていることが, こういう場面で生きるのかと感じた. 総じて, 本学のカリキュラムや教育理念はこのような場面で非常に良く発揮されるということが分かった.

【今後のボランティア活動について】これから冬になり, 避難所では雪のためますますコミュニティーの形成が困難になることが予想される. そんな時に, 今回参加した「カフェ活動」が非常に重要な役割を果たし, そこに本学が継続して支援できるかどうかは重要な課題ではないかと考えられる. また, 現地ではなにも片付いていないのに, 被災地以外



写真5



写真6



写真7



写真8

のところではすでに風化が始まっているような雰囲気を感じた。いかに風化させず、支援を継続するかが、本学のみならず日本全体の課題ではないか。

4. スポーツボランティア実習の課題と今後の展望

(豊田則成)

スポーツボランティア実習は、学生のスポーツ関わるボランティア活動を単位化する目的で2009年にカリキュラム化され、学部共通科目として3年生以上を受講対象としている。これは、スポーツ学の基礎的領域を既に学習したことを意味する。すなわち、受講生はスポーツボランティアとして活動するための知識と実践力を身につけ、現場で活躍することを志向している。

これまでに、スポーツボランティア実習を履修した学生はとても少ない。その一方で、周知の通り、スポーツフィールドでボランティアとして活躍している学生は沢山いる。なぜ、そのようなギャップが生じるのか？それは、スポーツボランティア実習が必修科目ではないことに依拠するところが大きい。大学教育のカリキュラム上で「必ず履修しなければならない」と位置づけられていないことは、授業運営をしていく上で大きな障壁となってしまっている。

しかしながら、学生がボランティアとして現場に入り込み、実践の「場」を得ることには大きな意味がある。しかも、その「場」はスポーツに限定されている。これまでも、多くの学生が「スポーツの場」で、キャンパス内で学んだことを実践／検証してきている。「他人のためにするものだが、実は、大きく自分のためにもなる」「当初はなかなか積極的に取り組めなかったが、いざ従事し始めると自覚が芽生え、主体的に取り組めるようになった」など、ボランティア活動を通じて学生の内面には大きな成長を期待することができる。スポーツボランティアが活躍できるシステムの構築を急がねばならない。

*発表者の氏名は発表順に記載してある。